



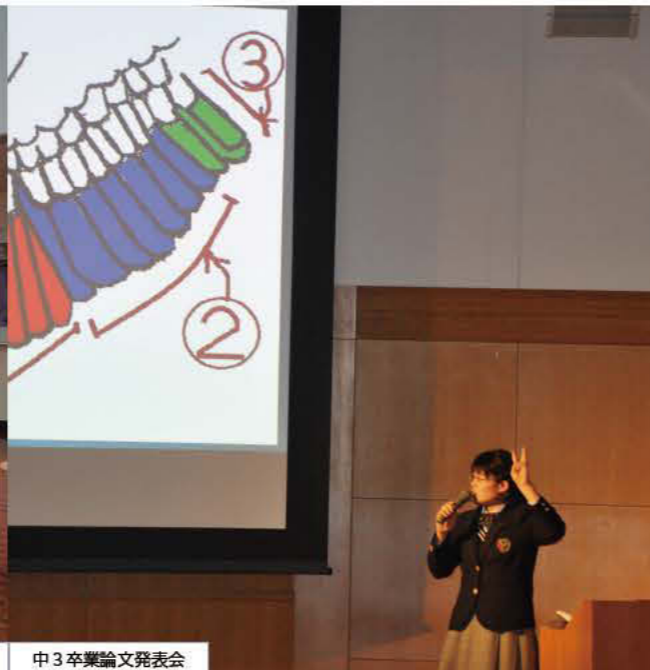
うらやましいほど、人間らしく。

好奇心を形にする素直な心、探究する力、健やかな体力を育てる

校訓「人間らしく生きる」とは――。
グローバル化や情報技術の進歩で、加速する時代の流れ。
将来の選択肢が増える一方で、本当にやりたいことが見えにくくなっている。
生徒の素直な感性を刺激する同校の学校行事は、自らの力で障壁を乗り越え、各々の“答え”にたどり着く底力を育てている。



吹き抜けのアトリウムには季節ごとの飾りつけがされる



中3卒業論文発表会



はじめてのカエルの解剖(中1)



子どもだけで知らない土地を歩く

電機大はとにかく行事が多い。月に一回は文化祭や体育祭、芸術鑑賞会や英語合宿などの行事があり、その半分は、山登りや少人数のグループで自主行動を行う遠足や地域散策だ。5月に行われた中2鎌倉見学会でも、決まり事は集合・解散の時間と場所、そして鶴岡八幡宮または大仏殿で先生のチェックを受けることだけ。あとは事前に配られた地図とメンバーを頼りに自分たちの足で歩く。

散策開始当初、正直、生徒たちは心もなかつた。北条政子の墓へ向かう途中、洞穴らしきものを見つけたら「あそこなんだろう?」と入ってみる? 「え、怖いよ」「一緒に行ってみよう!」とスズンズ進んでいく。銭洗弁財天への道中では「あれ?ここどこ?」「つくん!」と5秒に一回のペースで手元の地図とにらめっこ。じれったくなり思わず口を出しそつになる。班員の一人が「そろそろ行かないと時間なくなっちゃうよ」と声をかける。迷えば「あの標識を見ればいいんだ!」「ちょっと人に聞いてくる!」と、自分たちで気づき、自力で問題を解決していく。

「中2での班行動に『早すぎるのでは』という声もありますが、やってみると大丈夫なものなんですよ」と学年主任の山崎武光先生は笑う。「道に迷うなどちょっとしたハプニングに遭遇したときに、班員が一致団結して乗り越えたり、みんなを引っ張って行く新しいリーダーが生まれたり、どんどん自分たちで成長していくんです。30人のクラスで自分を出すのが難しくても、5、6人の中だからこそ輝ける。また一人じゃ尻込みしてしまうことも、友達の後押しで挑戦しようと思える。そうしたらひとつの経験が生徒の個性を作っていくんです。また、『好きな者同士』だけでなく、どんな人とも人間関係を作る力をつけるのが中学校です。いろいろな人との行動し、話し、新しい一面に出会う。それが大人への第一歩だと考えています!」



迷い、悩み、成し遂げた先に待っているもの

生徒の好奇心を限定しないのも同校の特徴だ。「円覚寺が面白くて長居しすぎちゃったので、予定していた場所を全部回れませんでした」と言う生徒もいたが、先生は気にしていない様子。じっくり見学したかったらすればいいんです。集合時間に遅れないために予定を変える判断も生徒に任せています。もちろん「楽しかった」だけで終わらないよう、事前に一人ひとりが見学先を調べ、後日レポートを提出する。文章でのアウトプットは、作文や、毎日の予定と感想をつづる「毎日ノート」を通して中1から鍛えている。

こうした人間関係構築力、好奇心を探究する力、そしてアウトプット力を「研究レベル」にまで進化させるのが中3の卒業論文だ。フィールドワークや実験、文献調べを通して「納豆のネバネバとおいしさ」や「車椅子バスケットを通して障害者について考える」など、それぞれの興味や素朴な疑問を1年がかりでリサーチする。発表会でジェスチャーを交えながら堂々と自分の言葉で語る彼らからは、心から研究を楽しむ精神と自信が感じられた。

大人が口を出せば答えは簡単に出るかもしれない。しかしそれは、ひとつの解答案でしかない。一見、回り道に見えるが、それぞれが迷い、悩み、感じ取り、成し遂げる。その先にこそ、真の答えが見つかる。鎌倉散策で生徒が見せた、14歳らしいたくさんの表情。冒険に向かうワクワク顔。迷子になった不安顔。友達を見つけ全力で手を振りほじける笑顔。そして、チェックポイントで先生を迎えられてほっとした顔に、美味しそうにお弁当をほおばる幸せ顔。「ドキドキ!」そんな心臓の音が聞こえてくるかのよう。目で、耳で、肌で感じ取ったものを素直に表せる生徒たちは、更に広がる未知の世界をしっかりと自分の足で歩いて行くに違いない。

